



八幡堀の遊覧船 (撮影: 史見山 繁)

4月3日、桜の満開には少し早かったのですが、楽しい「春のバス旅行」の出発です。近江八幡市は初めての町で、わくわくしながらの到着、中野先生が計画して下さった村雲御所瑞龍寺・日牟礼神社・資料館・近江商人の旧家・ヴォーリスの残した建物・かわらミュージアム等々の見学。また昼食は名物の赤いコンニャクを頂き(近江牛もあったかな?) 有意義で楽しい一日でした。

八幡堀の遊覧船は短い時間でしたが楽しい一刻で、昔はこの堀に沿って八幡瓦の工場が建っており、瓦は堀を利用して湖上から京・大阪・裏日本へと運ばれて行ったそうです。ヴォーリスの建築物は街に溶け込み、一般住宅の中は見学できませんでしたが、外観は手入れも良く心地よく住んでおられる様子でした。5月7日の夕刊に「ヴォーリスの代表作、療養所の名建築解体しないで」という記事が載っていました。「ヴォーリス記念病院」のツッカーハウスが老朽化したため、解体が決まったそうです。何とか改修・保存して後世に残せないでしょうか。近江八幡市で色々な古い建物を見せていただいた後で寂しい気持ちで一杯です。3月6日、酒井先生のご案内で心斎橋筋周辺の事務所や商店として活用されている近代建築を見て歩きましたが、その時の事を重ね合わせて近江八幡市内の建物を見て回ることが出来ました。

近藤 信子(友の会会員)

近江商人発祥の地、 近江八幡を訪ねて

戸田 健治

最初八幡山ロープウェイで、近江八幡市の全景観を見る。雨曇りの為、近くは良く見えたが遠望がきかない。

豊臣秀次の城跡に移築された村雲御所瑞龍寺は尼寺ではあったが、大勢の参拝者に気を良くしてか、奥まで案内して頂き、瑞龍寺ゆかりの秀次の塑像を拝見し、その奥の間から雲が切れ、市内の整然とした町並みや八幡堀が良く見えた。織田信長の安土城から見た景色も同じであったろうか。

近江八幡と言えば近江商人と思っていたのが、この村雲御所の穴太積みの石垣や街造りを見て、秀次のイメージが変わった事と、メンソレータムで有名な近江兄弟社を創業した、W.H.ヴォーリズの足跡が市の骨格を作っている事に驚いた。

町並みにある資料館が、三階建の強固な邸宅と学校等にも利用された不思議な建物を見学し、昔の水道管や背割りの下水道を見て、住環境が想起された。

又、湖とつながる八幡堀を観光船でユックリと河岸の美しさを眺め、昔日のノンビリした船旅を満喫した(後日TVドラマ大岡越前でその場所が使われていた)。

ヴォーリズの設計された建築物が、大阪の大丸心斎橋店をはじめ、最近有名になった豊郷小学校まで、多数あった事は初めて知った。メンソレだけしか頭になかった。

その建築群を見て廻って、その外壁の煉瓦も風情があって、外国の町並みを感じた。

最後に八幡堀沿いの、周囲の光景と溶け込む様にして、白壁土蔵の外観を見せている「かわらミュージアム」で、屋根瓦はもちろん、足元にも古瓦を利用した散策路があり、内部に入って窓から外を見ると、そこには種類の異なった葺の波が映し出された、瓦作りの美術館で、巨大な寺院の鬼瓦等の工法を聞かせて頂き、このミュージアムだけでも今回のツアーの価値はあると言える。

当日は色々盛り沢山の企画、資料で勉強させて頂き有意義な一日を過ごさせて頂きました。この企画の御骨折りと御懇切なご説明を頂いた中野学芸員に感謝の他ありません。(友の会会員)



近江八幡の町並み



ヴォーリズ記念館前にて

大迫力の太鼓張替え

4月14日 伝統工芸「太鼓正」見学記

小村 幸一



職人さん3人があらかじめ皮を張り仮締めしてある大太鼓を、胴を廻りながら小槌でドンドンドンと3拍子で汗ながら打つ。弱打ちから強打ちへ。拍子打ちから乱打へドンドンドン。職人さんが4人になったり、あらゆる音出しを繰返す。主任さんが太鼓台の下でじーと聞いている。張った皮のどこが強くてどこが弱いのか、万遍なく音が出ているのか我々には判らない。張りに弱いところがあるらしい。皮締めの太網を時々ジャッキ（音は万力か棒締め）できりりと締める。

次は大槌の出番。ドーンと力任せ。1か所のジャッキを締めた。この間延々40分。音色が決まって笠鉦打ち。胴縁から3寸のところのところに鉦筋を付け、2列に千鳥に鉦を打っていく。白皮に黒鉦は映える。

今回沢山のことを聞きました。音の高さ強弱は長年の勘、胴が保つ間は使える（店頭に文化9年=1812越前藩もの）、九州北海道産の皮は減少傾向だと太鼓正に、歴博民俗学の伊藤先生から芦原村が江戸期から太鼓村だった歴史と太鼓造りの手順など興味深く、「伝統工芸」（原案は阿部委員さん）のいい勉強になりました。

店頭でミニ太鼓を孫にと買求めの先輩を見かけ、なるほど五月飾りにいい趣向と感服。

見学した径2尺7寸の大太鼓は岸和田の張替え注文だった由です。

（友の会会員）

平野郷 全興寺さん

石丸 健子

平野は、大阪の中でも最も早く開けた町で、戦国時代には環濠と土塁をもって町を自衛し、町民によって町を運営する自治都市として、堺と共に日本の近世史に輝かしい足跡を残している。その中で全興寺は本町3丁目にあり、野中山と号し、本尊は「薬師如来」で聖徳太子の自作と伝えられる。地主神牛頭天王の本地仏であるから、本寺を氏神権現社の奥の院としてあった。伝説によれば今の全興寺は聖徳太子の創建で、ここに野堂がありここから平野の町が次第に広がっていったと伝わっている。今日でも野堂は平野郷の一番先に呼ぶ事になっている。

また広野磨の墓所の辺りから人が住み始め、その対岸に市村が交通の要点として出来、野堂に広がり、流や西脇、背戸口等が分かれていった。奈良街道の人の往来が多くなるにつれ、やがて泥堂や馬場が生まれた。最後には夏祭りに来る今在家、新在家、今林村が平野の散郷として出来たのである。

《平野町ぐるみ博物館》

町がこぞって毎月第4日曜日に特色を生かして、博物館行事を行っている。

全興寺さんの境内の一角にある博物館は、昭和20～30年代の駄菓子屋さんに並んでいたオモチャが展示されている。「地獄堂」「ほとけのくに」もあり、紙芝居の「はじまり、はじまり」も実演されている。また平野に点在する「ミニ博物館」を列挙しますと、鎮守の森、平野亭、新聞屋さん、自転車屋さん、くらしの

博物館、映像資料館、等々がある。

わけても大念仏寺は融通念仏宗の総本山で、本堂は大阪府で最大の木造建築物である。当山には幽堂が残っていた「亡女の片袖」をはじめ、数々の掛け軸があり、年1回（8月第4日曜日）、この日1日限り拝観が出来る。遠方より多くの人々が参詣され賑わう。

（友の会会員）

はもうさじ
はじまる!

特別展 東アジア中世海道

～海商・港・沈没船～

大澤 研一

東アジアの海は、それを共有する多くの国と地域を結びつけ、人、もの、文化、技術などの相互交流の場となりました。12世紀～16世紀における東アジアでは、国境や国籍を意識せず海を共通の世界とする海民・海商たちの活動を通じて、地域と地域がさまざまな形で結びつきました。この時代こそ、海の交流を礎として、アジアが最もきらめいた時代といえます。この展覧会では東アジアの海を舞台に、国や地域、人々が相互に影響を与えながら育んだ交流の歴史と文化のきらめきを、国宝4点、重要文化財12点、重要美術品1点をはじめとする277点の考古、文献、美術、民俗資料を通じて描き出します。

今回、必見の展示物をご紹介します。まずは、韓国からやってくる沈没船からの引き揚げ資料で(韓国国立光州博物館蔵)。この船は、1323年、日本へ航海中、韓国西南部の新安沖で沈没しました。この船から引き揚げられた日本人好みの中国陶磁や東南アジア産の香辛料など、当時の東アジア交易を生き生きと物語る一級品がやってきます。西洋人の来航の様子を描いた重要美術品の南蛮人来朝図屏風(国立歴史民俗博物館蔵)も普段なかなか見ることができません。これは、7/6～7/18(右隻)、8/24～9/6(左隻)に分けて展示します。

これ以外にも、朝鮮国との通交を認められた者が所持した重要文化財の銅印「朝鮮国通信符」(毛利博物館蔵)、国宝の宋版後漢書(国立歴史民俗博物館蔵)など、見所満載です。

(博物館学芸員)



会員のページ

現在の会誌に対する感想

高木 允通

大阪が、日本史の中心にあると確信する人は多いでしょう。歴史の心は、日常言葉にも生きています。商いの意味が問われる現代こそ、大阪の文化、商いでの先達の生き様が、あらためて見直されるべきかと思えます。効率・成果主義による経済活動の意義はともかく、文化をも商うしたたかさと面白さ、市民として生きることへのこだわりの真髄に迫り、その謎解きの喜びを含めた期待を大阪歴友にかけています。

(友の会会員)

編集後記

友の会会報第3号、「大阪歴友」としては第1号をお送りします。今回はこの春に行った行事の参加記を中心に掲載しました。「大阪歴友」の名付け親でもある高木さんからは、会誌への期待を寄せていただきました。また、先に原稿を募集していた「戦後60年」の企画には11人の方から寄稿があり、別紙折り込みで掲載しています。ところで幹事会では、今後決まったテーマでの記事を連載することを計画しています。次号くらいから開始できるかと思しますのでご期待下さい。

(事務局・まめ)